

# 安福寺横穴群他調査概報

2000年度

2001年3月

柏原市教育委員会

## はしがき

文化財を保存し、活用していくということは、文化財行政の最大の課題であります。本市では、埋蔵文化財に限っても、高井田横穴群の線刻壁画を中心とした横穴の保存、玉手山古墳群の残されている古墳、河内国分寺、鳥坂寺跡（高井田廃寺）、松岳山古墳群、安福寺横穴群、玉手山東横穴群など課題が山積しています。いずれも市民のご理解と財政的な裏付けが必要となってくるのですが、昨今の厳しい財政状況などのため、遅々として問題が解決されておりません。中でも、高井田横穴群の線刻壁画は、将来の破損が予想される危機的状態にあり、緊急課題となっておりますが、これについては、平成13年度から順次取り組んでいく予定であります。

このような状況のもと、安福寺横穴群において、所有者である安福寺と協議のうえ、損壊が認められる一部の横穴について、安全管理と保存のために、土嚢などを使用して閉塞することとしました。その経過について、本書で報告しています。また、寄贈していただいた船橋遺跡採集遺物についても紹介しております。

発掘調査は、本年度に実施した公共事業関連の調査として、府道建設と耐震性貯水槽設置工事に伴う調査の概要を掲載しています。

今後とも、本市では文化財の保存と活用のため、幅広い活動を実施していく所存でございます。みなさまのご理解とご協力をよろしくお願ひいたします。

平成13年3月

柏原市教育委員会

教育長 舟橋清光

## 例　　言

- 1、本書は、柏原市教育委員会が、平成12年1月から12月の間に公共事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査2件（平尾山古墳群2000-1次調査・船橋遺跡2000-7次調査）と、大阪府指定史跡安福寺横穴群における史跡現状変更、および寄贈資料についての概要報告書である。
- 2、調査は、柏原市教育委員会社会教育課　安村俊史が担当した。
- 3、本書の編集・執筆は安村が担当し、第5章船橋遺跡採集遺物の遺物の項は横原美智子が担当した。
- 4、府史跡安福寺横穴群の史跡現状変更に際して、大阪府教育委員会文化財保護課　芝野圭之助氏にご指導いただき、所有者である安福寺住職　大崎信宥氏のご協力をいただいた。また、船橋遺跡採集遺物は米尾一幸氏に寄贈していただいたものである。各氏のご協力に感謝したい。
- 5、調査・整理の参加者は下記のとおりである。

吉田 宏　　柳谷 好子　　川端 隆　　北野 重　　石田 成年　　寺川 欽  
谷口 京子　　横原美智子　　新田太加茂　　分才 降司　　堀 定夫

## 目　　次

第1章　概要.....	1
第2章　安福寺横穴群.....	2
第3章　平尾山古墳群.....	12
第4章　船橋遺跡.....	15
第5章　船橋遺跡採集遺物.....	18

# 第1章 概 要

本書では、大阪府指定史跡安福寺横穴群の安全管理に伴う史跡現状変更についての概要、2000年に実施した公共事業に伴う発掘調査の概要、そして寄贈いただいた船橋遺跡採集遺物の紹介を掲載している。

2000年1月から12月の間に、文化財保護法57条－3に基づく通知に伴って実施した発掘調査は本書に掲載している2件のみである。両調査とも、遺構・遺物は発見されていない。

同じ期間内に、57条－3（通知）に伴う立会調査は11件実施した。内訳は本郷遺跡3件、山ノ井遺跡2件、大畠遺跡1件、玉手山遺跡2件、田辺遺跡3件である。このうち山ノ井遺跡の1件は、水道管埋設工事に伴う立会調査であるが、他はすべて下水道管埋設工事に伴う立会調査である。また、これら以外に、本書掲載の平尾山古墳群における府道建設工事に際しても、立会調査を継続した。これらの立会調査では、いずれも遺構・遺物は確認されていない。

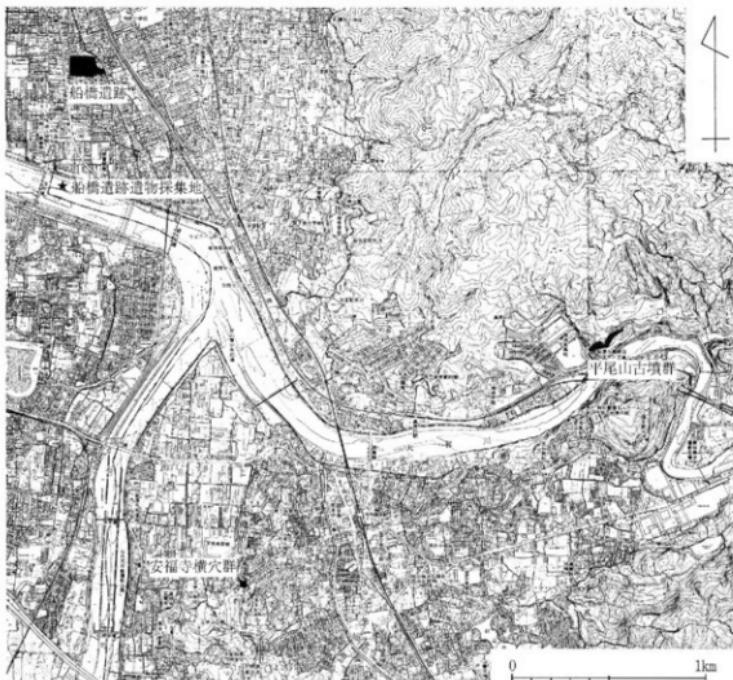


図-1 調査位置図

## 第2章 安福寺横穴群

### 1. 経過

安福寺横穴群は、北群・南群・西群の3群に分けられ、総数40基の横穴が確認されている。横穴は、6世紀中葉から7世紀初頭にかけて次々に築かれ、確認されている横穴すべての範囲が、大阪府の史跡に指定されている。

平成12年6月7日に、安福寺住職の大崎信宥氏から、一部が崩落している横穴があり、見学者が危険なため、安全対策を考えもらいたいと連絡があった。これを受け、6月13日に、大崎氏立ち会いのもと、本市教育委員会社会教育課文化係の川端隆と安村俊史が各横穴の安全点検を実施した。

その結果、北群1号横穴は崩落等は認められないものの内部が狭く危険を伴うこと、北群2・12号横穴は玄室天井部分がかなり崩落しており、危険な状態にあることを確認した。その他の横穴は現状で崩落の危険性が認められない、もしくは崖面の上位に位置するなどの理由によって、通常では横穴に立ち入ることができない現況にあるため、現状維持を図ることで問題ないであろうということになった。

そこで、北群1・2・12号横穴の安全対策について検討することにした。そして、安全性とともに

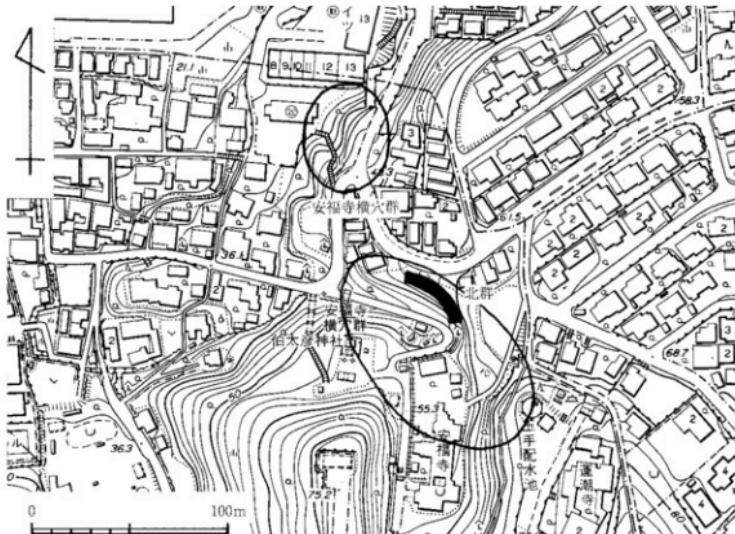


図-2 検査地位置図

に、横穴の保存、景観への配慮、経費、および今後の維持・管理等について総合的に考慮した結果、1・2号横穴は漢道部を土嚢で閉塞し、12号横穴については開口部にフェンスを設置するのが適切ではないかという結論に至った。12号横穴は、開口部が崩落のため大きくなってしまい、土嚢で閉塞することが困難と思われたため、土嚢や木杭でフェンスを固定し、内部に立ち入れないようにするのが適切ではないかと判断したものである。

以上のような方針を固め、6月21日に、大阪府教育委員会において、文化財保護課の芝野圭之助主査と協議し、指導を仰いだ。芝野主査からは、土嚢が白くて目立ちすぎるので、色付きの土嚢を使用するか、土嚢に黒いシートを被せるなど景観に配慮してもらいたい。12号横穴については、横穴の保存を大前提とし、あくまでも仮設ということで、将来の抜本的な保存管理計画において見直すことができるものとしてはどうかという指導をいただき、景観と安全性に十分配慮することを条件に、史跡の現状変更は問題ないであろうとの意見をいただいた。

これを基に、市社会教育課で検討を進め、土嚢はベージュ色の色付きの土嚢を使用すること、フェンスはダークブラウンとし、土嚢等で固定を図り、横穴への加工は避けるという計画を確定した。以上の資材の入手が可能かどうか等を検討したうえで、大崎氏と最終の協議をもち、9月中旬に現状変更を実施することとし、7月19日付けで、安福寺住職大崎信宥氏より府史跡の現状変更等許可申請書が提出された。この申請に対して、大阪府教育委員会から8月2日付けで、柏原市教育委員会文化財専門職員が立ち会うことを条件に、現状変更が許可された。その後、資材の準備や日程の調整を経て、9月11日に現状変更に着手し、9月25日にこれを終了した。

まず、土嚢を積み上げるために床面を平らにする必要があったため、各横穴の流入土を慎重に除去するとともに、床面の清掃を実施し、現状の写真撮影と実測図を作成した。これは、閉塞することによって、当面は内部の見学ができなくなるために実施したものである。

流入土は最近の空缶やビニール袋を伴うものであり、開口部付近がもっとも厚く堆積しており、玄室奥までは、いずれも達していないかった。北群12号横穴においては、この流入土を除去し、写真撮影のために床面を清掃している際に、漢門左隅で土師器が一部露出した。そこで、その周囲を若干掘り下げたところ、ほぼ完形の土師器鉢であることが確認されたため、出土状況の写真撮影、略測の後に取り上げることにした。これ以外には遺物の出土は見なかつた。また、ピンボール等で確認したところ、いずれの横穴でも床面まで10cm前後の堆積土が存在するようである。これについては、各横穴の断面図に床面の推定位置を点線で記入している。

実測作業が終了した横穴から、順次閉塞していくこととした。計画どおり、1・2号横穴は、ベージュ色の土嚢で閉塞したが、実際に積んでみると、意外と白さが目立つことがわかつた。そのため、土嚢積みの下半を土で隠し、少しでも違和感のないように配慮した。

12号横穴は、フェンスの両面に土嚢を数段積み上げることによってフェンスを固定し、開口部の形状からどうしても隙間のできる両隅には土嚢をやや高い位置まで積み上げて、フェンスの固定を図るとともに、外部から立ち入れないようにした。フェンスの色調をダークブラウンとしたため、少し離れるとフェンスが見えず、景観の保護は十分図れたと考えている。

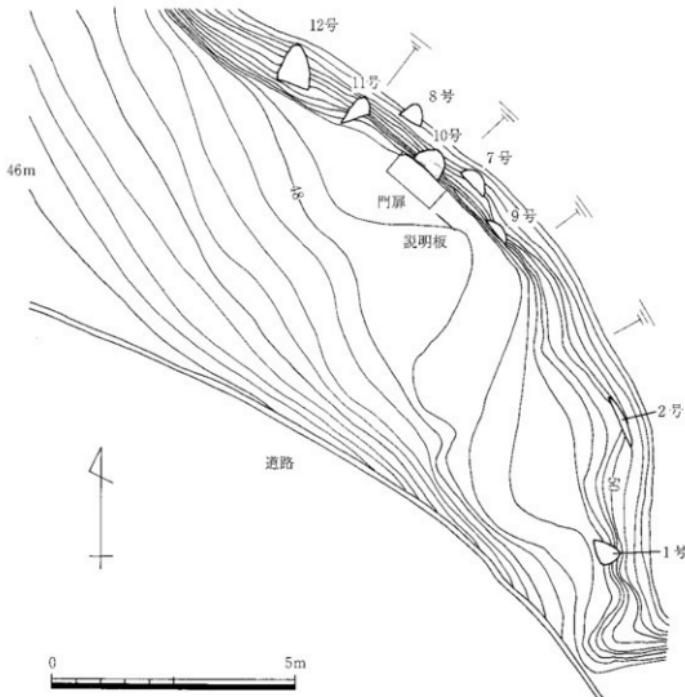


図-3 北群横穴位置図

以上のように現状変更が無事終了したため、9月29日付けで安福寺住職大崎信宥氏より現状変更等終了報告書が提出された。また、北群12号横穴から発見された土師器について、柏原警察署署長に埋蔵文化財発見届けを、大阪府教育委員会教育長に埋蔵文化財保管証をそれぞれ9月28日付けで提出し、現在は本市教育委員会で保管している。

今回の府史跡現状変更是、あくまでも安全を図るための緊急対策であり、将来的には抜本的な保存管理計画が必要であろう。安福寺横穴群の基盤となっている凝灰岩は、高井田横穴群と同じ二上層群の凝灰岩であり、永年の風化によって、かなり残存状態が悪くなっている。それとともに、周辺の開発に伴う振動や樹木伐採、地下水の変化等によって最近の劣化は激しいものがある。凝灰岩の保存策は困難であり、また多額の経費を伴うものもあり、今後の保存管理計画について慎重に検討していかなければならないと考えている。

以上のような経過で、史跡現状変更を実施した3基の横穴について、実測・観察の結果から得た所見を以下に紹介しておきたいと思う。

## 2. 北群1号横穴

安福寺の参道は、北西へ伸びる谷筋に立地し、その参道の北側、すなわち南西向きの斜面に位置する17基の横穴からなる一群を北群と呼んでいる。北群1号横穴は、その中で、もっとも南東に位置する横穴である。

北群1号横穴は、玄室掘削途中で掘削を中止した未完成の横穴である。玄室から羨道にかけてはほぼ床面が露出しており、羨道部分はかなり土砂が堆積している。羨門天井部が一部崩落しているが、他はほぼ完存しており、残存状態は非常に良好である。開口方向はS-73°-W、すなわち西南西である。<sup>(1)</sup>

玄室は長さ133cm、幅は中央で165cm、中央より玄門へ寄った位置で最大幅175cmである。天井までの高さは、玄室中央で97cmを測る。羨道は長さ87cm、幅は66cm前後でほぼ直線的にのびる。高さは87-93cmで、玄門部でもっとも低くなる。羨道は長さ180cm以上、前面は削られている。幅は羨門部で107cm、現存端部で100cmとややすばまっている。天井の高さは羨門部で111cm、羨門から90cm前後まで天井を伴う。床面の傾斜は約8°と、やや傾斜が強い。

玄室平面は不整円形を呈する。右側壁よりも左側壁のほうが掘削が進んでいるが、どちらも壁面は大きく湾曲している。床面は奥壁寄りで一段高くなっている。これらは、いずれも未完成によるものである。壁面には工具痕が顕著に残っている。奥壁・左側壁はいずれも左下がりの工具痕を残

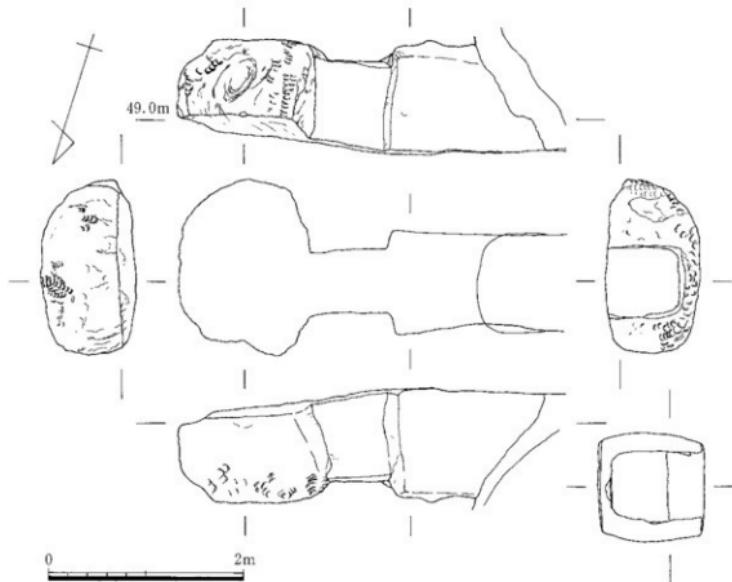


図-4 北群1号横穴

し、右側壁の右半分は左下がりの工具痕、左半分は右下がりの工具痕を残す。前壁は左半分は左下がり、右半分は右下がりの工具痕が残る。工具は幅5cm前後の平刃の工具を使用しており、右利きの人が掘削したものと考えられる。天井は緩やかなドーム状を描いているが、本来はもう少し高い天井を造る予定だったと思われる。

墓道の天井は平坦となり、壁面は平滑に仕上げられている。墓道は、完成していると考えていいであろう。

墓道は墓道からまっすぐにのびている。天井はほぼ平坦で、壁面は緩やかな弧を描いている。墓道壁面および墓門も、平滑に仕上げられて完成している。

以上のように、北群1号横穴は、墓道・墓道がほぼ完成しているものの、玄室の掘削はほとんど進んでいない未完成の横穴である。玄室の現況から考えると、埋葬が行なわれた可能性は低いよう思われる。実測後、墓道部分に土嚢を積み上げ、閉塞を行なった。

### 3. 北群2号横穴

1号横穴の北約3mに位置する横穴で、玄室前半部から墓道にかけて大きく損壊している。おそらく、横穴の位置する斜面が大きく削平を受けた際に、墓道から墓道にかけて損壊したものと考えられ、その後、玄室天井を中心に風化等に伴って崩れたものと考えられる。開口方向は、S-81°-Wで、ほぼ西向きに開口する。

玄室の長さは中軸上で300cm、左側壁で276cm、右側壁で313cm、玄室の幅は中央で253cm、奥壁で262cm、前壁で242cmを測る。奥壁と右側壁部分が広い、いびつな方形平面となる。墓道は両袖式に取り付くが、左袖部が奥に寄り、右袖部が前に寄っていて乱れている。袖の長さも、左袖が70cm、右袖が64cmとやや差がみられる。左袖部のもっとも残存状態の良好な部分でも高さ50cm、右袖部では高さ32cmを残すにすぎない。

天井は大半が崩落しており、現存最高部で136cmを測るが、実際は150cm前後になると思われる。天井はドーム状をなし、放射状の工具痕が認められる。床面の傾斜は2°前後でほぼ平坦である。また、床面には直径3~5cmの円跡が多數みられ、おそらく横穴構築時に防湿のために敷かれたものではないかと想像される。実際の床面までは5~10cm程度の土砂が堆積しているが、現状から考えると、すでに床面まで掘り返され、盗掘を受けているものと思われる。

天井と壁面の境には、切り込まれた段がみられる。前壁の状況は不明であるが、奥壁と両側壁の少なくとも3面には、段がめぐっていたことが確認できる。切り込み段までの壁面の高さは、奥壁で92~100cm、左側壁で90~92cm、右側壁で86~100cmを測る。左側壁の状況は、大きく損壊しているためによくわからないが、右側壁は前壁に寄るほど壁面がかなり低くなっている。切り込み段の幅は4~10cmを測り、左側壁で幅が狭くなっている。

墓道は、玄門寄りの床面の一部が、かろうじて残っていた。玄門部での幅は107cm、前端部寄りで幅100cmとなる。左壁で10cm、右壁で6cmの高さを残すのみであり、玄門の構造もまったく不明である。長さは80cm以上を測ることが確認できるが、墓道とどのように取り付いていたのかはまつ

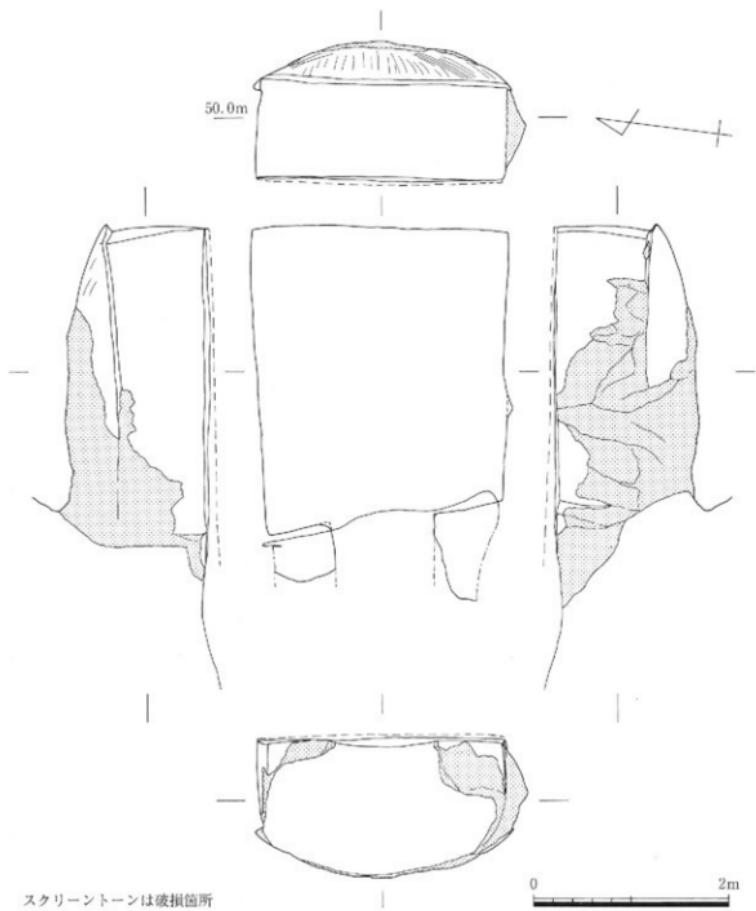


図-5 北群2号横穴

たく不明である。

2号横穴は、天井部の崩落が激しく、作業中にも一部で崩落をみるような危険な状況であった。そのため、完全に閉塞することとし、羨道寄りの玄室内に、土嚢を天井まで積み上げて閉塞することにした。

#### 4. 北群12号横穴

北群12号横穴は、2号横穴の北西10mに位置する。羨道から墓道にかけて、前面が大きく削平を受けている。その影響と思われるが、玄室の天井がほぼ完全に崩落しており、その崩落が右側壁の大半と前壁にまで及んでいる。かろうじて四隅が残っているため、各壁面と天井の状況を推定することができる。奥壁に直方体に造り出された部分があり、他の事例と比較して、造り付け石棺の未完成品と考えてまちがいないであろう。開口方向はS-7°-W、ほぼ南向きに開口する。

玄室は方形平面を呈するが、奥壁・左側壁側でやや幅が広くなっている。長さは左側壁で295cm、右側壁で268cm、幅は奥壁で324cm、前壁で270cmをそれぞれ測る。右側壁と前壁のなす隅部は、やや弧を描くが、他の3隅は明瞭な角をなす。

未完成の造り付け石棺は、やや奥に広がる台形平面を呈する。床面での長さは奥壁に接する部分で285cm、玄室中央寄りで237cm、幅は100cm前後である。上面では奥壁に接する部分が大きく弧を描いて張り出している。上面での長さは奥壁部分で247cm、玄室中央寄りで220cm、幅は90~100cmである。高さは玄室中央寄りで65cmを測り、奥に向かって少しづつ高くなっている。上面は平滑に仕上げられているが、東西の壁面には工具痕が残っており、とくに西側の壁面には縱方向に打ち込まれた工具痕が顕著に残っている。また、玄室中央寄りの上面が破損しているが、これは後世に破損したものと思われる。通例の造り付け石棺から考えると、長さ190cm、幅60cm前後の掘りこみを有する石棺とすることが可能であり、造り付け石棺の未完成品と考えるのが適切と思われる。

玄室壁面と天井との境に段はみられないが、その境は明瞭であり、意識されて掘削されたものと考えられる。奥壁は完存しており、高さは中央でもっとも高く、両隅でやや低くなる。壁面には工具痕が多数残されている。

左側壁もほぼ完存している。高さはもっとも高い部分で130cm、もっとも低い部分で116cmを測り、天井との境は奥から前へと約30cm低くなっている。壁面には工具痕が多数残されており、とくに床面に近い部分と両隅に近い部分で顕著に残っている。工具は幅5cm前後の平刃のものを使用しており、その痕跡から、かなりの刃こぼれがあったこともわかる。

右側壁は奥壁に接する部分と、前壁に接する部分を除いて、大きく破損している。壁面の高さは118~130cm。天井との境は、奥に近い部分でもっとも高く、前に向かって低くなっているようであり、高さの差は20cmを測る。

前壁は両隅を除いてほとんど残っておらず、玄門の構造もまったく不明である。

天井はドーム状をなすと考えてまちがいないと思われるが、現状は大きく崩落しており、もとの高さを推定することも困難である。

羨道は両袖式に取り付くが、玄門部が破損しているため、正確な構造が不明である。左袖の幅は約55cm、やや鋭角的になる。右袖の幅は約65cmで、ほぼ直角をなすものと考えられる。羨道の長さは108cm、幅は玄門部で150cm、羨門部で127cmと推定され、やや奥広がりの台形状平面を呈する。壁面は平滑に仕上げられているが、もっとも良好な部分で、高さ42cmを残すにすぎない。

羨道は羨門部で幅164cmを測り、前端に向かって徐々に狭くなっていくようである。長さは120cm

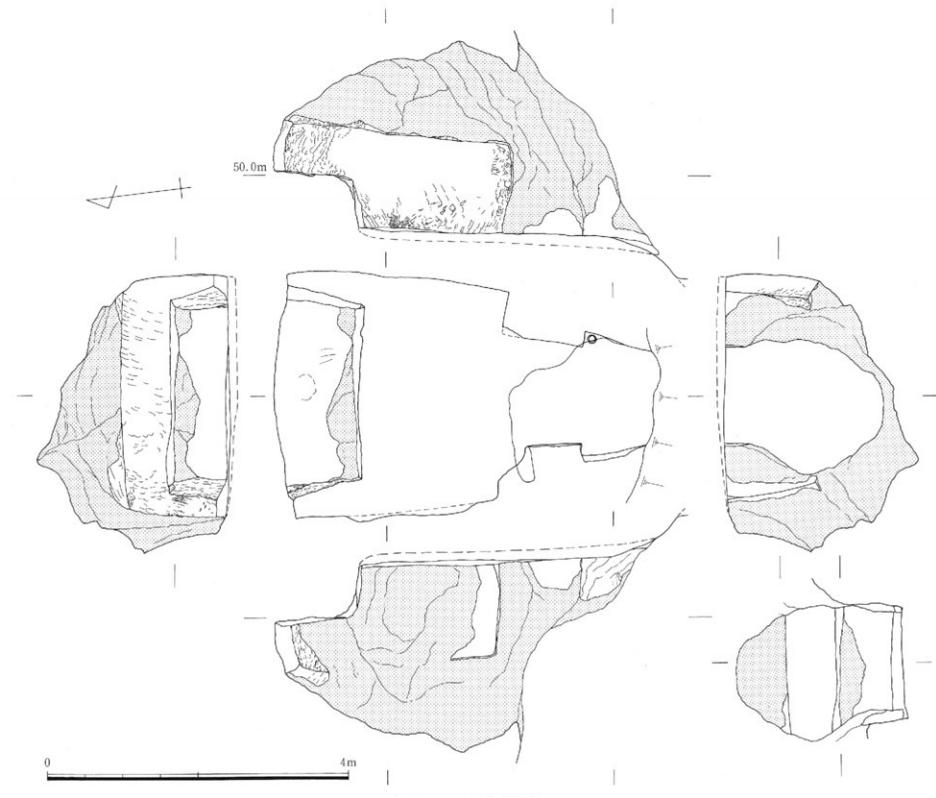


图-6 北群12号横穴

以上であるが、前面の削平のため、それ以上のことは不明である。壁面は、もっとも良好な部分で約80cmを残すが、羨門の構造はまったく不明である。

写真撮影のための清掃中に、羨門左隅部で土師器の口縁が検出された。そのため、全体を掘り出し、写真撮影、略測の後に取り上げることにした。玄室から墓道にかけては、10~15cmの土砂が堆積していることを考えると、この土師器鉢は、床面に置かれていたものと考えられる。このような状況から考えると、床面にはまだ遺物が残っている可能性が高いのではないだろうか。

土師器鉢は、検出時に口縁の大半を破損してしまったが、他はほぼ完存する。口径11.7cm、器高8.4cm。体部は扁平な球形をなし、底部は平底に近く、自立する。口縁は直立から壠部で外反し、やや凹面をなす。器厚は薄く、体部で4mm前後、口縁では3mm以下である。調整は体部外面をユビナデ、ユビオサエで調整し、内面は板ナデ後にナデを施して調整している。口縁から体部上半にかけてはヨコナデ調整。この土師器の年代を決めるのは困難であるが、7世紀代に下るのではないかと思われる。ただ、この土師器1点のみで横穴の年代を決めることは到底できない。横穴の構造等から考えると、6世紀末奈良頃の年代で大過ないのではないかと思われる。

12号横穴は崩落によって大変危険な状態にある。しかし、天井の崩落が激しいため、完全に閉塞しようとすると、土糞を積み上げながらすべて埋め戻す以外に方法がないように思われた。そのためには、多額の経費もかかり、今後の見学が不可能となるなどの弊害も考えられたため、フェンスを立てて、土糞で押える方法をとることにした。これによって、内部への立ち入りはできなくなる一方で、内部の観察は可能となる。現状では、最善の方法と判断した。

## 5.まとめ

大阪府教育委員会による1972年度の調査概要においては、北群1号横穴が小規模で不整形な玄室を呈するために7世紀代に下る横穴とされている。また、12号横穴の未完成の造り付け石棺を棺台としているが、どちらも未完成に伴うものであり、これをもって年代判定の根拠とすることはできない。<sup>(4)</sup> 1号横穴においては埋葬が行なわれていない可能性が高いと考えられるが、12号横穴においては、土師器の出土から、埋葬が行なわれているものと考えられる。今回の実測のみでは、各横穴の年代や性格を明らかにすることはできないが、資料作成という意味においては、貴重な成果であると考えている。今後も、保存・管理に努力していきたいと考えている。

### 注

- (1) 安福寺横穴群に関する記述、図中での方位は、すべて磁北である。
- (2) 側壁・袖の左右は、玄室から羨道を見た場合の左右で示している。
- (3) 大阪府教育委員会『玉手山安福寺横穴群調査概要』1973
- (4) 柏原市教育委員会『安福寺横穴群整備事業報告』1993

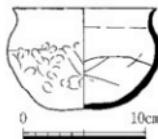


図-7 北群12号横穴  
出土土師器

## 第3章 平尾山古墳群

### 1. 概要

平成12年5月22日付けで、大阪府八尾土木事務所から埋蔵文化財発掘通知が提出された。内容は柏原市青谷1953-1の地において、一般府道本堂高井田線道路拡幅に伴い必要となる、工事用仮設道路の築造工事を実施するというものであった。

この計画に対して、本市教育委員会は、工事予定地は過去の分布調査において古墳は確認されていないが、周辺には多数の古墳が認められるため、事前に確認調査を実施し、古墳が確認されれば設計変更もしくは古墳の全面調査が必要となることを説明した。そして、調査対象地に繁茂している樹木の伐採後に確認調査に着手し、その結果をみて本調査の必要性について判断することとした。

その後、9月7日に現況を確認に行ったところ、重機が一部で掘削を開始していたため、至急八尾土木事務所に連絡をとり、9月12日に現地で施工業者を交えて3者で協議を行なった。その結果、現在掘削している部分は伐採のための進入路であり、工事工程の関係から認めてもらいたい。進入路設置とともに伐採に入る所以、伐採終了後に確認調査を実施してもらいたいというものであった。そのため、進入路設置工事中は本市教育委員会が立ち会い、古墳等が発見された場合は、その指示

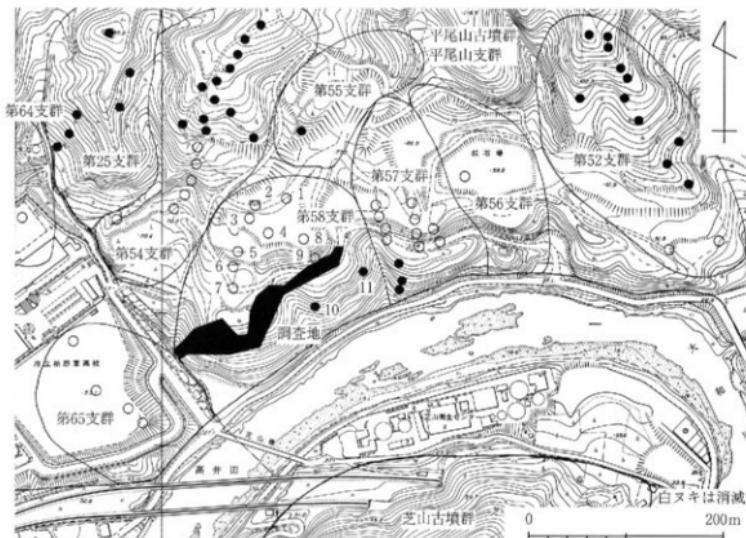


図-8 調査地位置図



図-9 トレンチ位置図

に従うことを条件に工事の続行を認めることになった。

進入路設置工事中には古墳等はまったく確認できず、その間にも協議を進め、10月4日に、施工業者から重機の協力を得て、平尾山古墳群2000-1次調査として確認調査を実施することになった。確認調査は尾根筋に2ヵ所のトレンチを設定して実施した。調査内容については後述するが、調査の結果、遺構・遺物はまったく確認できなかった。

この確認調査の結果を受け、その後の工事に際しても立会調査を継続することを条件に、工事に本格的に着手されることとなった。工事中の立会調査でも、古墳等の遺構および遺物はまったく確認されていない。

調査地は、平尾山古墳群平尾山第58支群内に位置する。大和川を眼下に望む、かなり傾斜の強い南斜面にあたる。周辺は後期古墳の密集地であるが、過去の土取り工事などによって、多数の古墳が破壊されてしまった地域でもある。第58支群においても、11基中9基の古墳がすでに破壊されている。現存する古墳の中で、11号墳は左片袖式の横穴式石室、玄室長232cm、幅154cmと報告されているが、今回は追認することができなかった。破壊された古墳については、埋葬施設等の記録も残されていない。

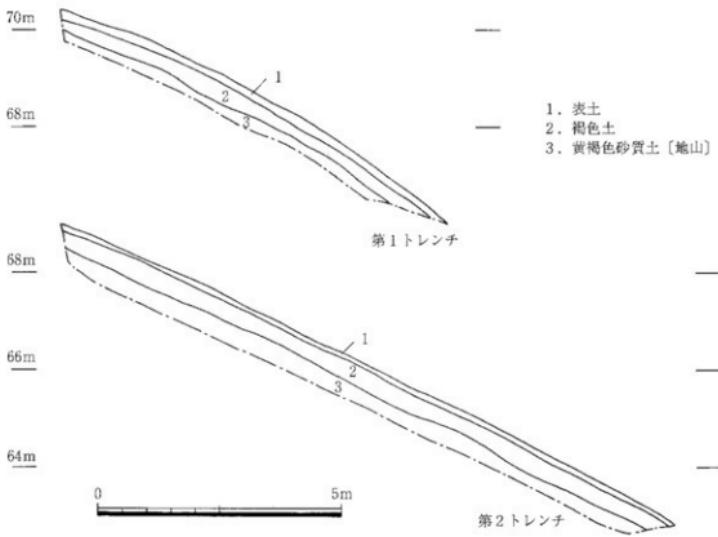


図-10 土層略図

## 2. 調査結果

調査は、尾根筋に2ヵ所のトレンチを設定して実施した。以下、東側の尾根に設定したトレンチを第1トレンチ、西側の尾根に設定したトレンチを第2トレンチとして記述する。なお、両トレンチの掘削に際しては、施工業者である辻機組から重機の協力を得た。

第1トレンチは、長さ9m、幅1mの規模である。地表下40~60cmで花崗岩の風化した地山に至り、遺構・遺物は確認できなかった。

第2トレンチは、長さ14m、幅1mの規模である。やはり、地表下45~60cmで地山に至るが、第1トレンチよりも地山の風化度が激しい。遺構・遺物は確認できなかった。

両トレンチとも、地山の傾斜も土層の堆積状況も自然の状態であり、人為的な加工等は一切認められなかった。そのため、両トレンチ周辺において古墳等の遺構が存在することはほとんどありえないと判断できるものであった。よって、工事に際して立会調査を行なうことを条件に、本調査は必要ないと判断した。ただし、これはあくまでも今回の調査範囲に限ってのことであり、今後予定されている府道の拡幅工事に際しては、また協議・調査を行なうことが必要であることを明記しておきたい。

## 第4章 船橋遺跡

### 1. 概要

平成12年6月14日付けで、柏原市長山西敏一より、埋蔵文化財発掘通知が提出された。内容は、柏原市大正1丁目9-53、柏原市立柏原小学校内において、耐震性貯水槽の設置工事を実施するというものであった。当該地は船橋遺跡内にあたり、4mの深さまで掘削するため、発掘調査が必要ということで、工事担当の本市総務課とすぐに協議にはいった。ところが、工事は素掘りで実施するため、事前に確認調査を実施しようとすると、工事に匹敵するほどの掘削を必要とすることがわかった。そのため、工事の掘削に際して本市教育委員会文化財担当職員が立ち会い、本市教育委員会の指示に従って掘削し、遺構・遺物等が発見された時点で工事を一時中断し、調査に協力する。もし、遺構・遺物等が発見されない場合でも、壁面を精査し、土層の観察、写真撮影、図化などを行なうこととした。調査は、8月1日から10日まで、船橋遺跡2000-7次調査として実施した。

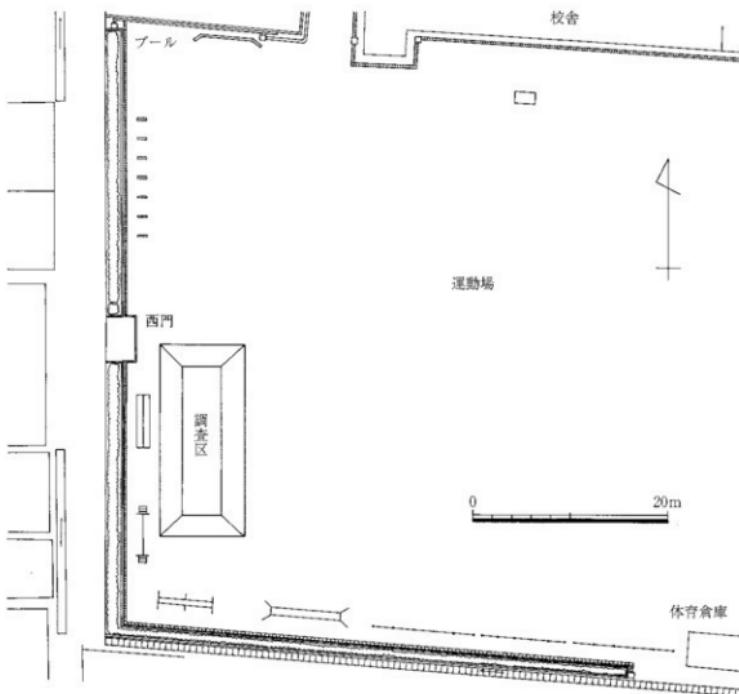


図-11 調査区位置図



図-12 調査地位図

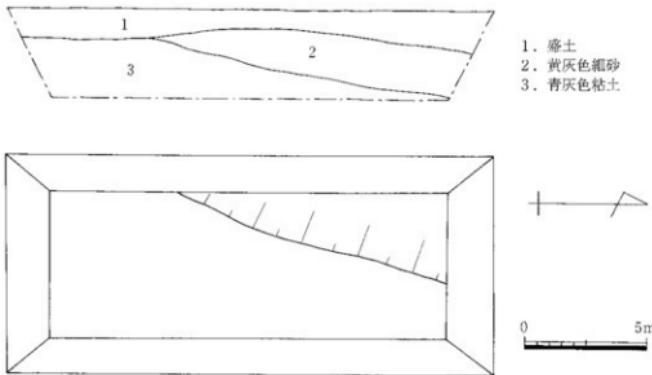


図-13 平面・土層略図

## 2. 調査結果

調査範囲は南北に長い長方形で、長さ20m、幅9mを測る。まず、北端から掘削が開始され、地表下1.6m前後までは学校造成等に伴う盛土、それ以下に灰色～黄灰色の細砂がみられ、かなりの湧水を伴うことが確認された。その後、掘り下げが進むとともに、湧水が激しくなり、地表下3.4mまで掘り下げた頃には、大量の湧水によって壁面が次々に崩壊し、急速簡易矢板を打たざるを得ないような状況となり、掘削も中断することとなった。そして、施工を担当している市道路課の緊急の設計変更によって、掘削深度を3.4mまでの貯水層に変更することとなり、工事が継続されることとなった。

このような状況のため、壁面の精査も実施することができず、土層の略測を行なったのみである。ただし、その間の掘削状況や掘削土の観察からは、遺構・遺物の存在は認められなかった。そして、大規模な湧水を伴う黄灰色細砂は、調査地の北西部分にしか認められず、土層や平面の観察から、この黄灰色細砂は南西から北東へのびる埋没河川に伴うものではないかと考えられた。黄灰色細砂の下層には青灰色粘土がみられるが、調査地南端では、この土層が地表下1.2mという浅い位置にみられる。その他の壁面の状況も加味すると、埋没河川の幅は10m以上、北東へ向かって流れていたものと考えられる。ただ、この埋没河川が黄灰色細砂のみを埋土とすることから、洪水に伴う一時的な流路と考えてまちがいないであろう。青灰色粘土からは遺物が出上していないため、その年代を決めることはできないが、土層の状況や周辺のこれまでの調査結果から考えて、近世の耕作土である可能性が高いのではないかと思われる。この判断でよいならば、埋没河川は大和川付け替え以後のものではないかとも思われるが、これ以上の推測は避けたいと思う。ただ疑問に思われるは、大和川の流路から考えると、付け替え以前であれ、以後であれ、洪水に伴うものであれば、北西流すると思われるのに、本例は北東流しており、疑問も残るものである。

以上のような状況であり、今回は十分な調査を実施することができなかった。

## 第5章 船橋遺跡採集遺物

### 1. 概要

ここで紹介する遺物は、米尾一幸氏が1993年6月頃に大和川河川敷の船橋遺跡で表面採集されたものである。これらの遺物は、1999年6月9日に柏原市教育委員会に寄贈されたので、図化し、本書で紹介するものである。

米尾氏によると、これらの遺物の採集地点は、1993年度の本市調査地点のⅡ区から下流の河内橋にかけての範囲で、出水後に採集したものということである。1993年度の調査は5月に終了しており、その調査終了直後ということになる。この頃から、遺物の採集できる地点が河内橋付近に限られるようになり、そして現在ではほとんど採集されることもなくなってしまった。

米尾氏には、これまでにも多数の遺物を寄贈していただいており、本市の貴重な資料となっている。なお、寄贈を受けた資料のうち図化可能なものは、すべて紹介してきた。(柏原市教育委員会『船橋遺跡』1994・『北峯古墳群・田辺遺跡』1999)

### 2. 遺物

1～5は壺。1は広口壺。漏斗状に広がる口縁部から、口縁端部は下方に抵張し面をもつ。面には2条からなる凹線文を施す。調整は頸部外側に粗い縱方向のヘラミガキ、内面には工具痕がみられるが、著しい風化のため詳細不明。口径18.0cm。在地産。2・4は小形の壺。2は頸部から肩部にかけて櫛描波状文・斜線文・直線文・簾状文（すべて同原体で5条／0.8cm）の文様、頸部内面にヘラミガキ、肩部にはナデ調整を施す。4は内外面共に、工具・ユビ調整がみられるが、著しい風化のため詳細不明。底径3.0cm。3は肩部。外面に9本からなるヘラ描き沈線とヘラミガキ、内

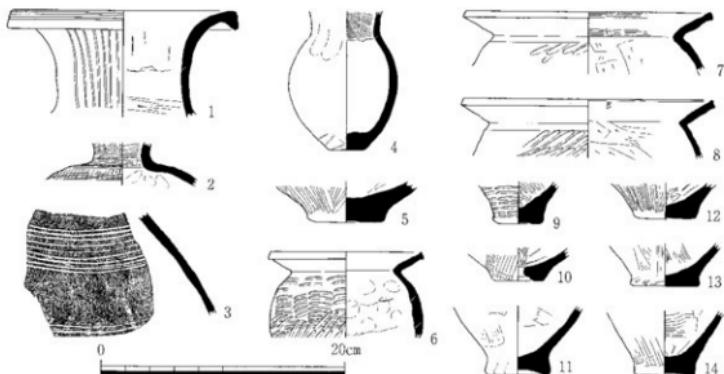


図-14 米尾氏採集遺物①

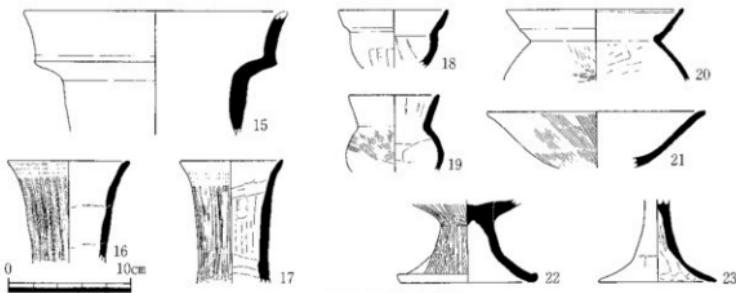


図-15 米尾氏採集遺物②

面には工具によるナデ調整を施す。I様式。5は底部。中央部が凹む平底。調整は外面ヘラミガキ、内面には工具痕がみられる。底径6.4cm。在地産。

6～14は甕。外面にタタキ（6～9）とハケメ（10～14）がみられ、6～8は鋸く「く」の字形に外折する口縁部から、口縁端部に面をもつ。6は体部外面に平行タタキ、内面にはナデ調整を施す。口径12.4cm。庄内期か。7・8は体部外面に平行タタキ、口縁部内面ハケメ、体部にはヘラケズリを施す。7は口径20.0cm。8は口径20.4cm。共に庄内期に下るものであろう。9～14は底部。9・11・12・14は中央部が凹む底部、10は中央部に穿孔、13は平底を呈する。9は外面平行タタキ、内面ハケメを施す。底径4.7cm。10は内外面共にハケメを施す。底径4.4cm。11は内外面に工具痕がみられる。底径5.4cm。12は外面ヘラミガキ、内面には板状工具痕がみられる。底径5.1cm。13は内外面共にハケメ（7本/cm）調整を施す。底径5.6cm。14は内外面共に板状工具痕がみられる。底径5.0cm。

15は段状口縁をもつ壺。調整は内外面共に風化のため不明。口径21.6cm。16・17は長頸壺。直立する頸部から、なだらかに外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。調整は外面ヘラミガキを施す。16は口径10.0cm。17は口径8.3cm。

18・19は小型丸底壺。18は内外面共に板状工具痕がみられる。口径9.0cm。19は体部外面と口縁部内面にハケメ（8本/cm）、内面にはナデ調整を施す。口径7.2cm。

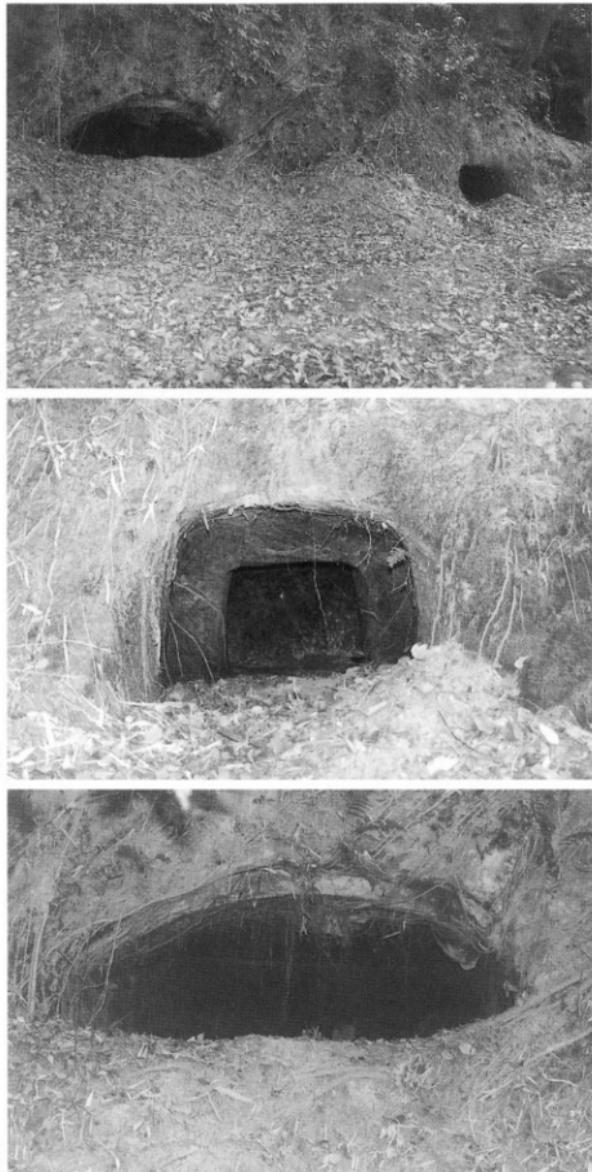
20は甕。鋸く「く」の字形に外折する口縁部から、口縁端部は内側に肥厚する。調整は外面に2種類のハケメ（5本/cm、11本/cm）、内面はヘラケズリを施す。口径14.5cm。

21は高壺の壺部。調整は外面ハケメ（9本/cm）、内面は著しい風化のため詳細不明。口径17.8cm。22・23は脚部。22は外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。裾径11.0cm。23は外面は風化、内面はユビ調整を施す。裾径9.6cm。

弥生土器は前期から後期までみられ、土師器は庄内期から布留期にかけてのものであり、弥生時代から古墳時代への移行期に集中する遺物である。

# 図 版

図版1 安福寺横穴群北群1・2号横穴



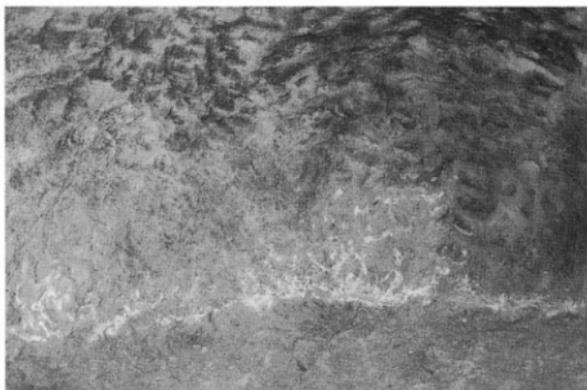
図版2 安福寺横穴群北群1号横穴



流入土除去後全景

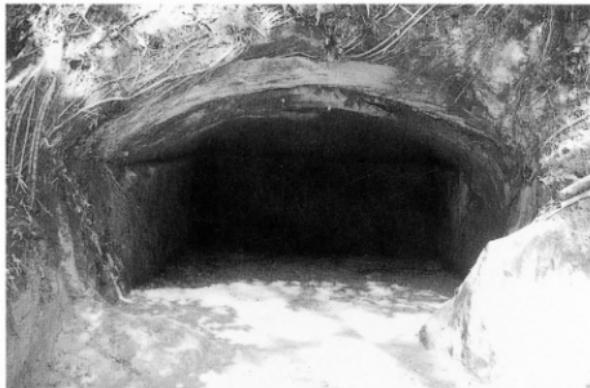


狭道(玄室より)



奥壁

図版3 安福寺横穴群北群2号横穴



流入土除去後全景



左側壁(奥より)



右側壁(奥より)

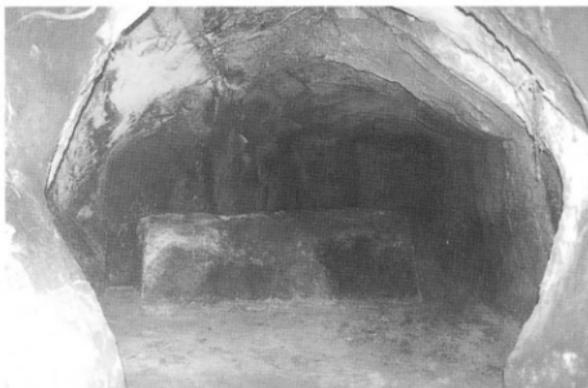
图版4 安福寺横穴群北群12号横穴



现状变更前全景



流入土除去後全景



玄室

図版5 安福寺横穴群北群12号横穴



未完成の造り付け  
石棺



左側壁



右側壁

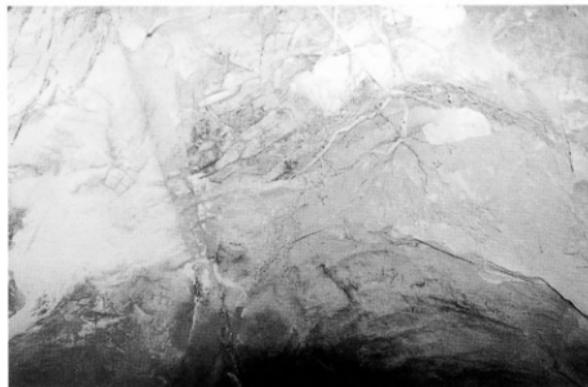
図版6 安福寺横穴群北群12号横穴



左袖部(奥より)



右袖部(奥より)

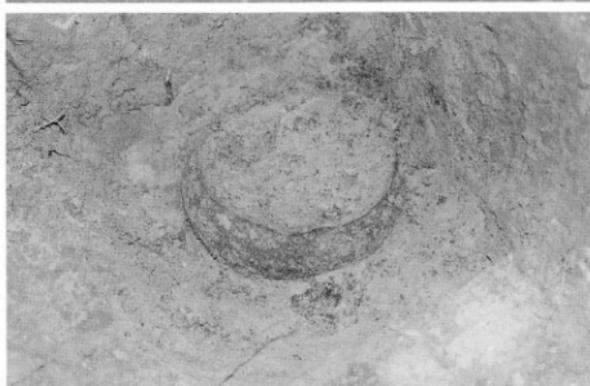


天井

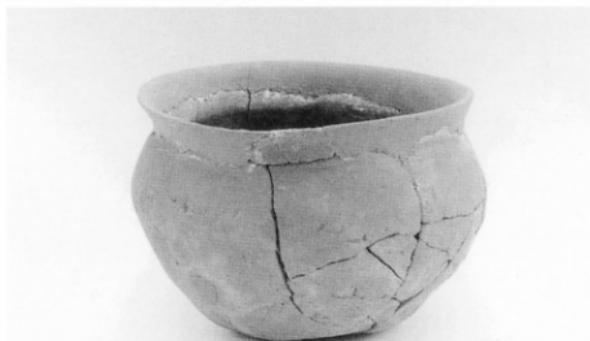
图版7 安福寺横穴群北群12号横穴



土师器出土状况



土师器出土状况

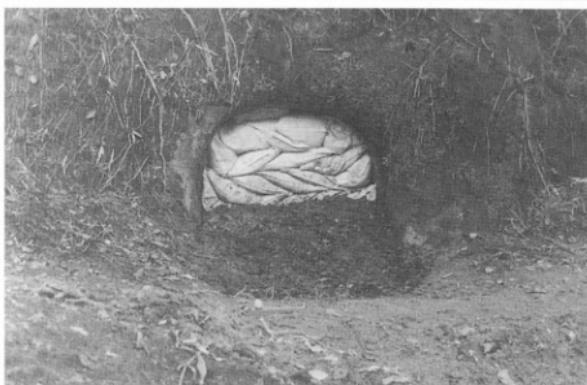


出土土师器

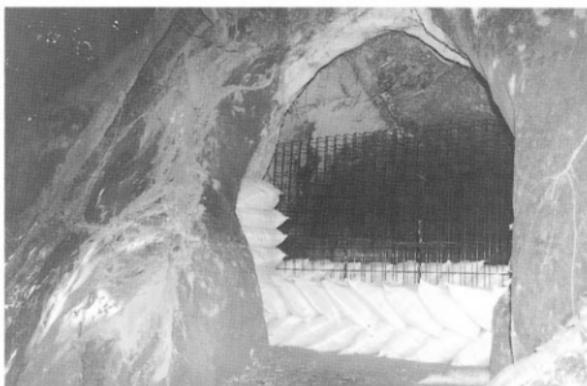
図版8 安福寺横穴群北群現状変更終了後



北群1・2号横穴



北群1号横穴



北群12号横穴

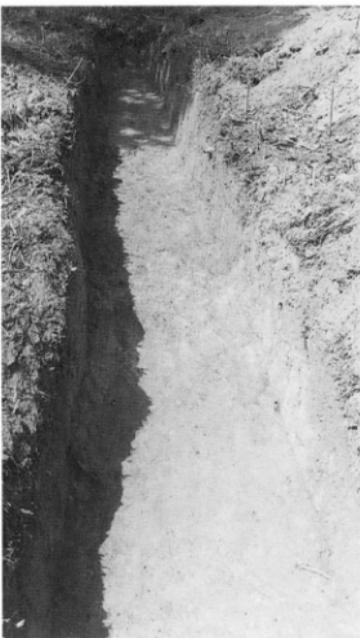
図版9 平尾山古墳群



第1 トレンチ調査状況(後方は大和川と芝山)



第1 トレンチ(北から)



第1 トレンチ(南から)

図版10 平尾山古墳群



図版11 船橋遺跡



遠景(北東から)



全景(北東から)



全景(北東から)

図版12 船橋遺跡



西壁(東から)



西壁北半(東から)



北壁(南東から)

## 報告書抄録

ふりがな	あんぶくじよこあなぐんほかちょうさがいほう						
書名	安福寺横穴群他調査概報						
副書名							
卷次							
シリーズ名	柏原市文化財概報						
シリーズ番号	2000-II						
編著者名	安村俊史						
編集機関	柏原市教育委員会						
所在地	〒582-8555 大阪府柏原市安堂町1番43号 TEL 0729-72-1501						
発行年月日	2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
安福寺横穴群	大阪府柏原市玉手町	27221 A F K 2000-1	34° 33' 37"	137° 37' 56"	20000913 ~0925	24.8m <sup>2</sup>	府史跡現状変更に伴う立会調査
平尾山古墳群	青谷	27221 H Y K 2000-1	34° 34' 17~ 21"	135° 39' 05~ 11"	20001004	23m <sup>2</sup>	道路建設
船橋遺跡	大正1丁目	27221 F H 2000-7	34° 35' 03"	135° 37' 21"	20000801 ~0810	180m <sup>2</sup>	耐震性貯水槽設置
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
安福寺横穴群	横穴群	古墳	横穴	土師器			
平尾山古墳群	古墳群	なし	なし	なし			
船橋遺跡	集落	なし	なし	なし			

## 安福寺横穴群他調査概報

2000年度

編集・発行 柏原市教育委員会  
〒582-8555 大阪府柏原市安堂町1番43号  
電話(0729)72-1501 内線5134

発行年月日 平成13年3月30日  
印 刷 (株)近畿印刷センター

